序章　子どもと自然、その支える人たち

序章1　子どもと自然、その支える人たち

ボクは、生きもの係だ

「生きもの係」って？

ボクは、生きもの係です。

教室にいろいろな生きものを持ってきて、お世話をしたり、クラスのみんなに見せたりすることが役わりです。生きもの係は、ボクを入れて六人います。

ボクが考えたこと

クラスのみんなにアンケートを取って、みんながどんな生きものがみたいのか調べました。

〈アンケートの結果〉

一　クワガタムシ
二　カブトムシ
三　バッタ、カミキリムシ
四　カマキリ
五　ハサミムシ、チョウチョ、トンボなど

ボクが今まで持っていった生きもの

・テントウムシの幼虫やサナギ
・いろんなイモムシ
・ダンゴムシ
・アリ
・毛むくじゃらのマイマイガの幼虫
・カブトムシ、クワガタ
・カナブン
・モンスズメバチのオスバチ
・いろんなバッタ
・コカマキリ

みんなの様子

♤テントウムシを持っていったとき

虫がきらいな子も好きになった。

♤ケムシを持っていったとき

「きもちわるい」って言っていたけど、一人がさわったら、ほかの子もさわるようになった。「ちくちくする？」と言っていた。

♤ハチを持っていったとき

最初、こわがっていたけど、「ハチはこわくないよ」って教えてあげたら、さわる子もいた。

♤ショウリョウバッタ（♀）を持っていったとき

「大きい?!　こんなの見たことない！」と言っていた。

♤その他の虫を持っていったとき

あんまり反応がなかった。

ボクは、生きものが好きだよ

ボクは、生きものの中で、両生類やは虫類が好きです。なぜかと言うと、かわいいからです。虫の中では、クワガタムシが好きです。

好きな生きものを見ていると、うれしい気持ちになります。初めて見る生きものに会うと、「こんな生きものがいたんだ」と思います。

苦手な生きものは、アカムシやアブラムシやバナナムシです。

（小学校三年）**関口広樹**

序章2　子どもと自然、その支える人たち

秘密基地と子ども

秘密基地とは、一般的には外から見えず、仲間内だけが知っている隠れ家といってよいだろう。子どもたちはそこでルールを作り、連帯意識を強め、自分たちの時間を楽しむことができる。

次のような秘密基地がある。四年生を担任した五月の子どもの作文である。

木の上のひみつきち

四年　山藤翔大

ぼくは四年生になって、三年生のころまったく登れなかった木に馬力で登ったら、長年の夢がかないました。

ぼくがその木に登れたのは、二〇〇三年四月二四日木曜日午後五時一三分です。すごくうれしかったから、メモりました。

それから、いろいろな物を置いたり、気持ちのいい場所を見つけてねたり、空を見たりします。よく風のあたる場所へ行って、空を見ながらぐっすりねると、ふとんの上より気持ちがいいです。

登ったら一回一回目印をつけて、今は五十回くらいです。

おかしやジュースをたまに持ちこんで、そこで食べると、すごくおいしく感じます。

これからも、もっと上を目指して、もっといい気持ちにしたいと思います。

ここには翔大君の成長の喜びがある。夢がかなった喜びがある。その喜びは、登った日付と時刻まで確かめ、記録させている。

この「木の上」には、自分だけの場所、空間がある。自分だけの時間、解放された心地よさがある。仲間から離れて一人自分を見つめることのできる場所である。家の前のこの大木は、誰もが知っている木ではあるが、その木の上は、翔大君だけの場所―誰にも邪魔されず、ゆっくりと自分の時間を愉しみ、自分と向き合うことができる、まさに秘密基地なのである。

翔大君の中で、木に登りたいという願いは、自らの目標になった。何度も挑んでは失敗を繰り返すが、やがて目標地点まで到達。自らの成長を実感し、目標達成した二重の喜び。この充実感をもたらしたものは、地域の自然環境である。市街地ではあっても、大木や野原、茂みが残されている。子どもの遊び、生活の場に自然があり、自然に働きかけるくらしがあったからこその秘密基地であった。

生源寺千加子

序章 3 子どもと自然、その支える人たち

子どもたちの今

私たちは、今を生きる子どもたちが「明日を生きる主人公として活動できる」ことを願って、さまざまなことをやってきた。最終回を迎えるのを機に「茨城の子どもたちの現状」を提示し、ともに考えてみたいと思う。

一つ目は「感情とか感動」という人間としての基本が育てられていないということである。それは人間のプラス面、子どものプラス面が出にくい状態の中で、子どもが苦しんでいることでもある。「感動する」ということは、そばに「感動を共有してくれる人」がいることが大切だ。通常、それは親であり、友であり、教師である。そういう人間関係が、特に思春期になるとつくり出しにくい状況になっている。子どもたちは、「人とのふれ合い、自然とのふれ合い」の中で「人は人によって人となる」という事実を体にすり込む必要がある。それができないことが、人間らしい感情が育てられない理由の一つであるように思う。

二つ目は、大人が社会のつくり方を子どもに教えていないということ。子ども社会をつくる豊かな体験が喪失させられていることにも原因している。学校教育や地域の中でモデルになる大人の存在、自分たちが主人公としての活動、真実や歴史を知るための学び―などの保障にも疑問が残る。また、子ども時代の喪失からくる人間関係の不安定さが目立つ。自己確認というか、「自分がこのままの自分であっていい」という見方、考え方が育てられていない。そのために、まわりに合わせることにきゅうきゅうとしている若者が多く見られる。

三つ目は、人間の基礎ともいうべき生きることに欠かせぬ衣食住。特に「食文化の崩壊」が若者たちに見られることである。女子高生の弁当箱の大きさが年々小さくなっていることや、誤ったダイエットのために、栄養の摂取の仕方が根本的に狂ってきていること。若者たちが家族の食卓から離脱せざるを得ない現在、改めて家族のつながりを〝食でつなぎとめるための努力〟が各家庭で真剣に求められる。「食べる」ということや「生きる」ということを「人間の生物的立場としての食」「家庭の根幹としての食」として追求すべきところに来ている。

四つ目は、学校が徹底して地域に開かれたものにならなければならないことである。それは、地域の○○さんを呼んできて、学校行事や授業に参加してもらうということだけではない。学校教育のあり方や目の前にいる子どもたちの明日のために、相互に知恵を出し合うことである。子どもたちを真ん中にして、教育を創り出していくための連絡協議会のようなものが必要とされる時がきているように思う。人々が生活している地域の中で、人間のありようを真正面からとらえられるような、地域と学校ぐるみの行事や授業が求められる。その地域ならではの創

造的教材の開発が用意されることである。現実の生活が息づいている地域の真っただ中に、子どもや若者たちを向わせることである。そこでは子どもが先生に教える時もあるだろう、親や年寄りが教師になることもあるだろう。そんな中に学校を位置づけるということである。そこで初めて、子どもは生かされ、自分らしさを発揮できるのではないだろうか。

学校の教師と共同して、自分や仲間たちとの輝いている多くの子どもたちがいる。生き生きと実践している若者たちのことも私たちはよく知っている。だから余計そう思うのである。

志賀伸三郎

＊つくば子どもと教育相談センター編『子どもたちの風景　今を生きる子どもたち　第二集』二〇〇二年より転載

序章4　子どもと自然、その支える人たち

若者が知りたいこと・社会に期待していること

高校生一年生に「授業でどんなことが知りたいか」を聞いたところ、大部分の

表1　若者が知りたいこと

1	語学
2	自分の考えをハッキリ表現する
3	社会や今の日本などについて関心をもち意見をもつ
4	人と助け合う事
5	人とのつきあいかた
6	人からいろんなことを学んで、大切にする
7	自分の将来、なりたいものにふさわしくなるように学びたい
8	自分の夢に向かって、たくさん勉強する
9	協調性
10	自分が将来何をしたいのかを考える
11	地球の環境について
12	環境問題について
13	自分以外の人がどんなことを考えているか
14	現代社会の現状
15	目標に近づくための知識
16	１つの課題をあきらめずに続けていけること
17	人や動物のつくり
18	経済
19	自分は、頭は良くありません。だけど、みんなにないモノを持っているし、それを武器にがんばっていこうと思っています
20	天気について知る
21	人間の体のしくみについて
22	幸福論、幸せになるために、幸せであるために
23	生きるために最低限度の必要なことを学ぶ
24	集団生活において、人との助け合いや支え合い
25	人の生き方を参考にする
26	人として他の人とどう付き合えばよいか
27	将来の夢のために必要なこと
28	世界を知る
29	数学
30	人としての人間性
31	いろんな人とうまくやっていけるにはどのようにすればいいのか
32	物事をよく考える
33	自分の夢にかんけいしたものをさがす
34	人との関わり合い
35	知っていると役に立つことを学ぶ
36	人が人として生きる意味
37	人とかかわること
38	スポーツ

表2　テストで良い成績をとるにはどのように勉強したら良いか

	(1)	(2)
教えられたことをよくおぼえる	19.0	4.5
大事なことをはっきりさせる	26.7	54.5
よく考える	5.6	29.0
役に立つことをはっきりさせる	0.9	4.5
家で予習復習をよくやる	40.9	6.7
テスト前になったら計画的にきちっと勉強する	6.9	0.9

生徒は、自分のこと、自分の将来、人とのつき合い方に集中していた。一クラス三九人の答えを示した表1からその実態を具体的にみることができる。

六クラス二〇〇人をこえる生徒に三つずつ書いてもらったものを集計してみると、これらについての回答が六〇％をこえた。またそれらの多くは漠然としたものである。社会的な問題に対しての関心はその半数以下となり、自然についてはわずかに五・四％であった。また具体的に的を絞った回答は四分の一強であった。若者の関心事は一言でいえば、自分や身近な日常的なことであり、しかも漠然としたかたちで現われているということができる。

しかし、教師のはたらきかけによってこの傾向は大きくかわる。テスト勉強のしかたもテスト問題の形式をかえるだけで大きくかわる。同じく入学したばかりの高校一年生に対して「どのように勉強すればテストで良い成績がとられるか」と質問したところ表2の（1）のようになったが、テスト問題の解答のしかたを「自分で大切と思ったことを文章形式で表わす」というように伝えたところ、表2の（2）のように変化した。

若者の現代社会に対する期待について調査したら、多いのは「世界の武力紛争をなくす」、「環境問題を解決」、「犯罪防止」の三つであった。これは、アンケートで大人の側からこういうことを期待しているのではないかと考えていることを一〇項目から三つ選んでもらった結果である（表3）。

少なかった項目は、年齢によって、学校によってちがっていた。千葉県の高校生も埼玉県の中・高校生も「スポーツの振興」がもっとも少なかったが、千葉県の中学生はそうではなく、一九九七年の中学一年生では、三番目に多かった。千葉県の中学生では、一〇年前も「政治の腐敗をなくす」ことが少なかった。

「教育に対する改善」の要望は高いほうではないが、とくに一〇年前の千葉県の中学生では少なかった。それに対して「犯罪防止」が比較的高かった。これは、千葉県の高校生でも高く、埼玉県の中学生・高校生はともにあまり高くない。これはどちらが全般的な傾向で、どちらが特殊なのかは、この調査ではわからない。

「経済の安定」は千葉県の中・高校生で比較的高く、埼玉県の中・高校生ではあまり高くない。「生活の安定と健康」は、全体的にあまり高くないが、経済危機とマスコミに報じられていること、それがその実生活への悪影響のあった二〇一〇年の現在においては、高率になるだろうと予想される。

「差別のない社会の実現」は埼玉県の中学生と一〇年前の千葉県の中学二年生に多い。ことによると実生活の上でそういう実感をもっているのかもしれない。

もの示し、それが若者たちに反映している。

岩田好宏

けでは実生活の上ではそうした実感があるわけではない。

「科学技術の発達」は、とくに多いじられる社会の実態について実生活を通じて感じられることと、環境破壊のように、

これらの社会への期待は、そうした社会全体が高い関心を

序章5　子どもと自然

その支える人たち

おとなと自然

もと自然」を逆転したテーマであり、そ

子どもと自然学会の最大テーマ「子ども

おとなは自然を利用する

長野県北部の鍋倉山にはかつて日本一といわれたブナの巨木、森太郎（直径

れはまさに学会の最大の解答のものである。ここでは、私がおこなっている自然観察会を例に「おとなと自

然」の特性を、子どもとの対比で概観し、紹介したい。

表3　若者は社会に何を期待しているか

	中学 1年 千葉市立 1997年	中学 1年 千葉市立 2007年	中学 1年 埼玉私立 2007年	中学 2年 千葉市立 1997年	中学 2年 千葉市立 2007年	中学 3年 千葉市立 1997年	中学 3年 千葉市立 2007年	中学 3年 埼玉私立 2007年	高校 1年 千葉県立 2006年	高校 1年 埼玉私立 2007年	高校 2年 千葉県立 2006年	高校 2年 埼玉私立 2007年	高校 3年 千葉県立 2006年	高校 3年 埼玉私立 2007年	平均
1世界の武力紛争をなくす	16.5	13.2	58.8	12	9	18 ○	16.8 ○	59.4	44.5	51.4 ○	65.8	42	47	42.2	
2環境破壊をなくす	60 ○	19.9 ○	64.7	45	15 ○	85.5	15.2 ○	59.4 ○	60 ○	59.6	57.9 ○	61.8 ○	59.1 ○	60.3	49.3
3スポーツの一層の活発化	57	9	3	25.5	7	24	3.9	6.3	12.3	1.9	7.9	4.4	10.8	4.9	61.2
4政治の腐敗をなくす	4.5	1.9	11.8	4.5	4	5.4	5.2	18.8	19.4	28.7	10.5	30.2	18.1	21.3	4.2
5科学・技術の発達	21.6	4.5	14.8	27	7	21.6	5.8	21.9	21.9	25.8	7.9	17	18.1	19.8	22.8
6経済の安定	6.9	3.9	14.7	0.3	7	0.3	7.4	6.3	36.1	10.3	31.6	18.7	36.2	27.1	19.7
7教育がおろそかにならないように改善	0.3	5.8	8.9	15	8	9	6.1	43.8	13.5	30.6	13.2	42.4	13.8	26.2	16.7
8犯罪防止	60.9	18	41.2	34.5 ○	18	48	15.5	25	41.9	20.8	52.6	15.3	43.1	8.8	31
9生活の安定と繁栄	22.5	7.4	23.5	14.4	12	24	10.4	9.9	25.8	27.2	15.8	21	25.4	20.2	20.5
10差別のない社会の実現	18	13.2	38.3 ○	54	11	13.5	8.7	37.6	21.9	31.9	36.8	19.1	25.4	24.2	28.8
11とくにない	4.5	1.9	8.9	15	2	7.5	4.2	6.3	×	3.9	×	0	×	4.3	4

注1：今の社会のどの点を改善してほしいと思いますかという問いに対する回答

注2：2007年調査の千葉市立中学校の集計結果は、10の選択肢のうちいくつでも選択した結果、その他は3つを選んだ結果

注3：太字は上位3つ、○がついているものはもっとも率の高いもの

一八〇センチメートル）がそびえる巨木の谷がある。山腹の凹地で尾根からの風を防がれた巨木の谷は名のとおり直径一メートル以上ものブナの巨木が林立する特異な森である。五月の残雪上で緑に芽吹くブナの森はそれはすばらしい眺めで全ての訪問者を魅了する。かつては道もなく容易には巨木の谷にも森太郎にも辿りつけなかったので、私もたびたび観察会の案内をおこなった。足元は悪いが、ササも少なく草花も豊富な美しい森である。森ではブナ林の生態やその価値、この森が伐採されそうになり反対運動があってやっと残されたことなどを解説する。数時間後に林道にでて森を振り返り、参加者に感想を聞く。一様に「すばらしかった、ありがとう」の言葉が発せられる。そこで「そうですね、今日私たちはすばらしい森を楽しませていただきました。私たちはこの自然からたくさんのものを得ましたが、では反対に私たちはこの自然に何かしてあげたのでしょうか」と問いかける。私たちは歩くことで森の土を傷め、草花を踏みつけ、沢の水を汚したのだ。沈黙せざるを得ない。「今日は何もできないかもしれません。でもこの自然と友だちでいてほしい、またいつか救いが必要なときは、ぜひ今日のこの感動を思い出してください」と救いの言葉で終わりにした。でも、この問いは今でもおとなの自然観察会の大きな課題であり、本稿の主題でもある。

おとなは自然を意識的に見る

自然は子どもにとってもおとなにとっても環境として重要であるが、その重要性は圧倒的に子どもの側にある。自然観察会における子どもとおとなを比べると、その大きな違いに気づく。子どもは「すげー」とか「おもしろい」とか全身で自然を感じ、それに向かってゆくのに、おとなは「きれい」とか「なんで……なんだろう」と頭で考える。考えてみれば、子どもはただ自然の中にいるわけではなく、それらと遊び、対峙し、経験から学ぶことで日々大きく成長する。子どもは無意識にではあるが成長のために環境としての自然を全身で吸収するようにつくられており、それが子どもにとっての生活といえる。レイチェル・カーソンが「知ることは感じることの半分も重要ではない」と述べているのは、まさに子どもが全身で自然を感じながら成長することを指摘したものだ。翻って、おとなは子どものように全身で自然を感じひたることができるだろうか、できればそうしたいものだと思うが、もはや意識的にしか自然を受け止めることができない。成長をとめたおとなにとって自然はもはや遠く、生活とかけ離れたものとして意識するしかない。おとなの生活とは働き、稼ぐことであり、自然はもはや身近には必要ないものとなった。

おとなは自然を資源としてみる

かつて「小さなものたちの自然保護」というテーマで講演を頼まれた。保護といえばパンダやクジラにゴリラ、日本でもイヌワシやクマなど比較的大きな動物に関心がゆくが、実際には小さな昆虫などにも貴重種や絶滅危惧種は多い。なぜ人は大きな動物に、より大きな関心を払

うのだろうか。でも、子どもは身近なアリやチョウ、川のサカナなど動くものには何でも興味を示し触ったり捕まえようとしたりする。子どもの日々の成長のためにはこうした身近な細々とした生き物たちが最もふさわしく、かつ子どもの手によってはそれは容易に絶滅したりはしない。それがおとなになるとより大きな動物に関心が移るのは、食料として自然を考えるようになるためではないかと。食べるための獲物としてみると、より大きな動物のほうが捕獲の努力に対して得られる効率が高いからである。現代でも古代でもおとなにとって生活とは働くことであり、労働にかかわる範囲でのみ自然は意味をもってきた。そして労働にかかわらない自然との付き合いが現代の自然観察会なのかもしれない。まさに、バードウォッチングなどが貴族の趣味として始まったことなどはその例でもある。

おとなは自然を子どもに教育する

多くの生き物は何のために生きるのか、どんな未来でありたいかなどの意識をもたずに生活しているだろう。その進化の中で調和的に生態系として共存しうるもののみが淘汰され現在の地球に存在する。ヒトの子どもも、この世界に調和的に共存するために、環境としての自然を吸収しつつ成長する。たぶん何のために生きるのか、どんな未来でありたいのかなど考えることなく、その日々を自然な成長に任せて生きる。しかし、唯一ヒトのおとなは意識を進化させ、強大な社会を構築し、多くの生き物が共存する生態系からは大きく踏み外した。自然と関わる一次産業者は日本では少なく、多くの人々にとってもはや自然は遠いものとなった。地球環境問題はその顕著なあらわれであり、自然は意識的に理解し、意識的に取り扱うべきものとなってきたのである。しかし、人はその意識を個人の快楽のためだけに使うのであれば、この地球により高度な意識による共存社会を築きあげることはできない。人は他の生物とは異なり人類や全地球の未来をも構想することができる意識をもつのであるから、まさにそこにこそおとなのその能力を発揮すべきである。

そのモデルはありえていないが、どんな社会を構築するにしろ、子どもの成長を考えれば環境としての適切な自然こそが最重要であることにかわりはない。しかし、現代の教育においては、子どもの環境としての自然が極めてうすい。それは教育制度がまさに自然を必要としないおとなの理念、意識によって構想されているところから始まるからではないだろうか。社会の中で生きてゆくためのおとな像が教育の目標とされれば、それは経済や社会規範が中心の教育とならざるをえない。子どもは何よりも自然の中で自然に多くのことを学び成長するのであり、そのための教育が欠けるとすれば、それは生物としての人の大きなゆがみである。

おとなは自然を子どもに残そう

自然観察会においてはおとなの方が熱心で、かつ大きな感動を示す。子どもはあれこれたくさんの不思議を発見するがおとなほどおおげさに感動はしない。

感動は本能ではなく、周囲のおとなからの学びでもあるから豊かな感情のためには、豊かな感情をもったおとなの存在が必要である。観察会でおとなは自然に感動し満足し、その日を終わる。しかし、子どもが全身で吸収した自然からの経験は子どものどこかに残り、子どもを大きく成長させるだろう。子どもの成長に自然が必要であれば、その自然を残すことがおとなの義務である。

現代のおとなの生活には自然はいらないかもしれない。でも子どもが自然から豊かな感動をえるためには、感動はどんなものかをおとなは教えなければならない。子どもは自然を自然のままに吸収し吸収し成長するが、それをより豊かに育むためにはそのモデルとして、自然に向き合い感動するおとながそばにいる必要がある。子ども時代に自然とともにある中で豊かな感動をもったおとなといることで、子どもはより豊かな自然体験をえるだろう。おとなは子どもに豊かな自然を残そう。そして、子どもと共に自然にはいろう。おとなと自然と子どもは世代を超えて、結びついているのだから。

渡辺隆一

序章6 子どもと自然 その支える人たち

宍塚の自然と歴史の会

活動場所の特徴

NPO法人「宍塚の自然と歴史の会」が活動する場所は、茨城県土浦・つくば両市の市街地から数キロに位置した、広さ約一〇〇haの里山である。中央に宍塚大池（三haのため池）があり、その周囲にはコナラ林、クヌギなどの雑木林が広がり、ため池から流れる小川沿いに谷津田が伸びていて、都市近郊の里山としては極めて良好な自然環境が維持された場所である。また池を取り囲むように縄文前期から江戸時代まで人が暮らした証である多くの遺跡が散在し、歴史的な環境にも恵まれたところである。

子どもたち、若者たちとの活動事例

▽観察会　子どもが理解できることに主眼を置いているものの、専門家による正確な、科学的な視点による観察会を毎月行っている。参加の親御さんが自然、歴史・文化を科学的な視点で捉えることの大切さに気付き、これが子どもたちに大きな影響を与えている。また観察会終盤になると、子どもたちに、はがきを配り、感想を絵や文で書き送ってもらっている。参加者の振り返りの時になり、会としては観察会の記録になり、参加者の感想を知る機会になっている。

▽環境教育部会による活動

〈対象〉

小学校・中学校、大学生、専門学校生、大学サークル活動

《実施形態》

観察会―幼児、小学校、中学校、養護学校、障がいのある子どもたち

学校には四季折々の観察会の計画をお願いしているが、地元の小学校では一～六年生までほぼ四季を通して宍塚の里山でさまざまなことを学び、活動している。

自然観察は、個々の動植物の話に終始するのではなく、生態系を捉えること、すなわち「食う食われるの関係」、「すべての生きものが自然環境を支えていること」を伝えることを心がけている。

例えば子どもたちがやって来る前にブルーギル・ブラックバスなども含め、池の生きものを捕獲するなど、事前に準備する。これによって池の生態系を伝えることが可能になるばかりか、外来生物の問題なども扱うことができる。

室内自然体験―会ではフクロウやタカなど五体の触れるはく製、亀の甲羅と骨の標本、白鳥や小鳥の骨、チョウやマムシの標本などさまざまな教材を作っている。宍塚に来られない子どもたちには、教室でこれらの教材を使った自然の疑似体験を行っている。

体験活動―可能な限り体験学習を実施している。中学生には里山ガイダンスを教室で行ったあと、里山の竹林拡大の問題にチャレンジ。なぜ竹林が拡大することが問題なのかを土壌を調べることなどを通して竹林の伐採活動を全員で行うなど、環境学習と保全活動を実施。また池のハス刈り等も体験するなど体験学習も多岐にわたる。

総合的な学習―

・田んぼの学習：小学生―田植え、田んぼの生きもの調べ、稲刈り、脱穀、餅つき等、年間を通して田んぼについて学ぶ
・オニバス：地域の代表的な植物（絶滅危惧種）を通して環境問題を学ぶ
・竹林の学習：小学生、中学生、大学生
・里山の生きもの：小学生、中学生、
・里山の歴史文化：小学生、大学サークル
・畑、田んぼ：大学サークル
・果樹園：中学生、大学サークル
・林の草刈りなど：大学サークル

▽子ども探偵団

特にテーマを決めず子どもたちの関心、目の輝きを大切に活動。小川でザリガニ取り、原っぱでバッタ取り、くるみの木の下でネズミのレストラン探し……毎月さまざまな体験を実施している。

▽田んぼ塾

親子で年間を通して田んぼ体験、稲について学ぶ、食を考える授業

▽水路作り、圃場（ほ）整備、稲籾（もみ）撒き、田植え、さなぶり、田の草取り、かかし作り、オダ作り、稲刈り、脱穀、収穫祭、かかし送り、全体学習（室内）など一連の活動を家族で行う（三・四才の幼児もしっかり体験）

会のルール

学校など団体の活動以外の活動で、子どもたちの参加を願う活動には二つの基本ルールがある。

①親子で参加すること：小学生は親子で参加することを旨としている。親が自然環境について関心を持つことの大切さを思うからである。親子で参加することがあとあと子どもたちにいい影響が出ていることも実感している。

②参加を無料とする：会の活動には専門の講師を招くことも多く、また行事保険

などに加入するなど経費がかかっている。しかし子どもたちの参加を願う時、若い親御さんの負担をなるべく軽減することが大変重要なことと考え、会の活動参加はほとんど無料で実施している。例外は収穫祭など昼食を伴う活動のみ原材料費として三〇〇円を徴収している。

環境教育を支える活動

子どもたちの活動が実施できるのは、これを支える活動があるから実現できる。活動の事例をいくつか挙げると、

▽観察路約（3.2㎞、1.8㎞）の整備、観察路周辺の整備

▽年十一回、一回一四〇〇〇枚の（宍塚大池のお知らせ）の、つくば・土浦両小学生への配布。楽しいイラストの入ったお知らせ、観察会、子ども探偵団、その他イベント、調査の参加などを募っている。

▽調査活動　自然環境に関する調査活動（植物、動物、夜行性動物調査なども、野鳥、両生爬虫類、キノコ、植生、水質等）歴史・文化調査の結果を報告書や「聞き書き里山の暮らし―土浦市宍塚」（茨城県中学校推薦図書）「続・聞き書き　里山の暮らし―土浦市宍塚」にまとめ出版している。

及川ひろみ

序章7　子どもと自然、その支える人たち

学校と自然と子ども

転勤した島小学校は琵琶湖の東に位置し、子どもの人数の割には校区が広く、自然環境に恵まれた学校だった。この学校での授業や生活を通しての自然の関わりについて、子どもとともに実践してきた。

定点観測のはじまり

「一九九九年四年生理科実践より」

四年生の理科を担当することになり、まず、学校付近のフィールドワークから始めた。校門の前には転作の麦畑が広がり、その向こうには田植えを待っている田が広がり、さらにその奥には山がある。とてもすばらしい自然がそこにあった。

四年生の子どもたちを毎時間ここへ連れ出して、季節の移り変わりを実感させることを柱にしようと考えた。子どもたちに趣旨を説明し、ほぼ一週間に一回は外に出た。子どもたちはその度ごとに喜んでいた。

＊すずしく、緑いっぱいの景色、青い空の下で、とっても気持ち良かった。自然って気持ちいいね。　（あすか）

＊今まで、草とかは生きていないと思っていました。けれども、今、自然は生きているんだなと気付きました。

（なるみ）

と自然に触れた感想を書いている。

そのうち、子どもたちは五月中旬、少し茶色になりかけた麦畑に草のすべり台を作って遊び始めた。

＊みんなと畑で遊んでいると、自然でも

こんなに遊べるんだと思った」
（かいと）

＊麦遊びは道路に立って助走をつけて麦の方に思い切りジャンプする。他にも土を持って土合戦をする。もう一つ草の所で寝転んで麦の方に転がっていく。他にも道路に立って麦の方に思い切り走っていく。他にも麦の方から助走をつけて思い切り走っていく。
（つよし）

＊すべりだいは学校にあるすべりだいではなく、麦で作れるすべりだいです。理科の勉強で見つけた。学校を出たらすぐにある。白王に行く途中にあります。草をぺったんこにして跳んだりすべったりして、服はとってもよごれて、遊びヘッドをしながら、すべった人もいました。
（ゆうや）

と自然への新しい発見を生きいきと綴っている。中には

＊今日、草遊びをしておもしろかった。ジャンプをしたり、転がったり楽しかった。みんなと一緒に転がった。おかげで服がどろどろになった。先生はそれでいいと言っているので安心した。今日は遊びもできてうれしかった。

と服がよごれたことをすごく気にし、教師の言葉に安心するという現代の子どものおかれている状況の深刻さも垣間見た。

子どもたちの定点観測は、まず、外へ出ていけば景色（山、麦、稲、花、虫他何でも）から季節を五観（五感）を使って感じる。気温を測る。そして、いつもの場所でクラス全員の記念撮影。

中村ゆうさんの五感
耳…水の音が聞こえる
目…山がきれい
鼻…土のにおいがする
肌…風が気持ちいい

茶色が濃くなる麦畑を子どもたちは、チーズケーキと名付け、「チーズケーキの上をシオカラトンボが飛んでいる」とスケッチした。麦刈りのときも「トラクターがチーズケーキを食べている」と表現し、麦が刈り取られていくのを残念がっていた。

夏。麦畑は刈り取られ焼畑の後、豆が植えられ、田は緑の稲が風に揺られて波打つほどに成長し、山の新緑はいよいよ深くなった。七月一三日。夏にしてはあまり陽射しのきつくない日。みんなアスファルトの道路の上にねっころがって……。

＊定点観測をして、みんながねっころがった。わたしもねっころがったときにドキドキしたけど「あったかーい」と思った。
（わかな）

＊一学期の最後の写真を撮ったとき、植田先生が「ねそべって」と、私たちに言って、私たちはねそべりました。そのときに写真を撮りました。道はとってもあたたかかったです。それに気持ち良かったです。私はまたやってみたいなと思いました。道は気持ち良いと思った。楽しかったです。（ともみ）

とそのときの思いを夏新聞に綴った。しかし、春新聞とは決定的に違うことが

夏新聞にはあった。

＊みんなお待ちかねの夏になりました。山桃の実も赤くなり始めました。実を採っている人もいます。（ゆきひで）

＊暖かくなってきたので、かぶと虫が成虫になりました。そんなに一杯生まれると思いませんでした。うれしかったです。（たまき）

＊ぼくはこだますいかを育てています。そして、七月五日ごろに実がなりました。その時は野球ボールぐらいの大きさでした。そして、今はふつうのボールぐらいの大きさです。（きょうへい）

＊春まで私の家の玄関でピヨピヨと元気で鳴いていたつばめのひなたちも巣だってあの巣には返ってこないのかなあと思うとなぜか悲しい気持ちになります。（なるみ）

と、授業で扱っていない自然の変化にも目をやって、季節の変化を捉えている。

こんな取り組みの中で、

＊自然は色が変わってたりするから楽しい。二学期も理科を頑張りたい。（ひろあき）

＊とっても春を感じることができてうれしかった。ひろきに「四年になったら、自然を感じられるよ」と言いました。私はこの理科は心にのこしときます。（あすか）

という思いを子どもたちと共有できたことはとても幸せだった。

子どもとの共同実践の立ち上げ

〈二〇〇〇年四年理科実践より〉

子どもとの共同研究の始まり

二年目、再び四年生の理科を担当することになった。昨年に続いて定点観測を、二週間に一回の割で進めた。子どもが変わると授業も学習内容も変わる。目の前に広がる自然は同じなのに子どもたちの感じ方は違っていた。

子どもたちは前庭では桜だけでなくメタセコイアやイチョウの変化にも目が向くようになり、教師自身が二年目の新しい発見をしていた。そして春、子どもたちは山口の山に登ろうと提案してきた。二時間で帰ってこられる山登り、タイマーを手に出かけた。その道々、草笛工作が始まったり、春から初夏の島の自然を満喫していた。そののどかな時間の流れの中、子どもたちが発見したのは黄色く輝く菜の花畑だった。菜の花畑に行き写真を撮りながら観察を続けていると、子どもの一人が「これがなたねあぶらになるんや」「ほんと、すごい」「不思議！」と驚きの声があり、実際に菜種をつぶして「油がでた」と大はしゃぎ。その時、直感的に「これは教材になる」「これにこだわっていけば何かが見えてくる」と思い、子どもたちとの共同研究を始めた。

「油にしぼって売ろう」

菜種畑の色の変化、種のできていく様子、菜種刈り、その中での菜種を作っている農家の方との出会い。菜の花畑をきっかけに、子どもたちはたくさんの人

や物と出会っていく。

定点観測に出かけたある日、田谷（地域の農家）さんと偶然出会い、菜種の種落としを村の人たちと一緒にすることができた。村の人たちは子どもたちのために、とうみを用意し、目の前で実演してくれた。菜種の収穫は二二kgにもなっていた。重い菜種を引きずるようにして学校へ持ち帰った子どもたちは、「この菜種どうする？」と聞いてきた。そのうち「油に搾って売ろう」との声が高まったが、夏休みに入ってしまった。しかし夏休みが終わっても子どもたちの関心は消えず、菜種油はどのようにしたら絞ってもらえるのかというリサーチをした。

①インターネット②タウンページ③田谷さんに聞く④家の人に聞くと、四つの扉から追求した。女子中心にリサーチが始まり、「愛知食油」を発見。何とその油しぼり工場は、学校の給食納入業者だと後で分かった。早速、子どもたちは「愛知食油」と連絡を取り、工場見学を実現させた。そして、自分たちの収穫した二二kgの菜種をしぼってもらうことにした。

子ども祭で

子どもたちは「油にしぼって売ろう」という当初の目標に向かって動き出し、子ども祭のお店を思いついた。お店を作るためにどんな役割分担が必要か。宣伝、油容器集め、注文集計、仕入れ、原価計算と儲け、ラベルづくり、お店の装飾等々夢が広がった。

いよいよ開店。体育館の玄関に机を一つ置いて、大きい油屋の看板を出して、「一〇〇％島産菜種の油入りませんか」とかけ声が響いた。子どもたちは学校内にとどまらず、近くの住宅へと、訪問販売までやっていた。この取り組みの中で子どもたちは様々な感想を持った。

自分の家に持って帰って
家の人に見せて

＊家に持って帰ってお父さんに「持って帰ってよかったんか？」と聞かれた。訳をせつめいすると、「ほりゃよかった」といってくれた。「三月三〇日、かほとまさ大の誕生日の夕ご飯にしよ」とお母さんが言ってくれた。おばあちゃんにちゃんと見せたら喜んで仏様（おじいちゃん）にみせてくれた。すごく油を歓迎してくれてうれしかった。（松井）

＊お母さんが油をみて「すごく色が濃いなー、いい匂いやなー」といいました。僕は、菜種油で何か作りたいとぐちゃぐちゃ卵を作ったら、すごくいい匂いでした。（小林）

＊「おおすごいなー、どこで搾ってきたの」「なんで、島の油なん」（浦上）

＊おばあちゃんが「香ばしくていい匂いやなー」て言ってくれました。お父さんが鶏肉を油で焼いたら火の通りが良くてちょっとこんがり焼けておいしかった。（久田）

自分で油を売ってみて

＊ダイエーとか行ったら買うほうやけど、今日は売る方だった。叫んでいたら、のどが痛くなった。買ってくれてとてもうれしかった。知っている人が、五個も買ってくれてうれしかった。

（西川）

＊外でどっかのおばちゃんがまってくれた。最初のお客さんが一番ドキドキした。一本でも自分で売ったのが楽しかった。よし笛中走り回って叫んだらやっぱり効果はあった。予想以上に売れたし、油かすも一袋も売れ残らなかった。（久田）

＊売れるときは楽しかって、時間がはやく思えた。でも体がついていった。（梅原）

＊はじめて、売り物をしてみたら、とっても楽しかった。お客さんがいっぱいきてくれて、とってもうれしかった。「やったー！　いっぱい売れた」お客さんがいっぱいきてくださると、ちょっと忙しかったかな。でもこういう経験もたのしい。みんなに買ってもらってこっちも楽しかったし、買ってくれた人たちも喜んでくれてて、うれしかった。（初古）

田谷猛司さんへ

＊お元気ですか？　菜種ありがとうございます。油ができました。油を売りました。買いに来てくれた人が結構いました。油かすは全部売れた。自分たちでラベルをつくった。一八〇ミリリットル二二〇円で売りました。私たちのことを忘れないでください。とてもいい油です。ありがとうございます。（西川）

＊この前、菜種をくださってどうもありがとうございました。菜種を搾ってくれるところがみつかりました。おかげで立派な菜種油になりました。本当にありがとうございました。（村北）

島町の人は菜種を
　なぜただでくれたのでしょう？

子ども祭が終わって、さらに学習を続けることにした。

「島町の人は菜種をなぜただでくれたのでしょう？」問いを子どもたちにぶつけてみると、以下のような五つの答えが返ってきた。

①やさしいから
②菜種殻が必要だったから（祭りの松明として）
③学校のため
④先生が裏で頼み込んだから
⑤手伝ったから

どの答えも、子どもたちが素直に考えたもので納得できるものだった。特に④はおもしろい。五つの答えを認めつつ、実際にはもっと大事な問題が隠されていると言って別の答えを探させた。ヒントとして「愛知食油見学カード」を全員に配り「このカードの中に答えがある」と話すと、早速「国産と外国産の値段」とつぶやきが聞こえた。何人かが気付き始め「国内産は高くて売れない」「外国産の安い菜種が入ってくると売れなくなる」「お父さんは野菜を作っているけど、外国から安い野菜が入ってくるので困っている。これと同じ問題や」。

そこで「日本の野菜作りを守るためにセーフガード。輸入制限をして欲しいっていま要求している」と解説した。

子どもたちは次のような感想を持った。まず率直に疑問を出す子もいた。

＊島の人はなぜ菜種をただでくれたのかまだ分からない。（一二三）

見当違いの意見を書いている子もけっこういて、もう少し時間をとる必要もあったかと思うが、生活の中に菜種が位置付いないということも理解を妨げている要因として大きいと思った。

＊今日の二時間目に理科がありました。今日は菜種をなぜくれたのかということを話しました。あまり売れないそうです。国産のやつは高いから売れないそうです。外国はずるいと思います。（涼）

と軽く考えてしまう子もいます。

＊ただでくれやるわけは、私は「やさしいから」「学校のため」など、そんな感じやからかなあと思った。これからの日本は大変です。（奈津子）

＊外国の果物などが多く売れたら日本の果物などは売れなくなってしまうのでとてもこわい。（兵馬）

＊僕たちが大人になったら、もう国産の食べのもが食べられないのは、いやです。そんなことがあったら、復活して欲しいです。（覚）

＊国産の野菜など売っている人たちは苦労していることが分かった。商売は大変なんだということが分かった。（祥子）

と真正面から捉えている子もいた。

また別の角度から、

＊いくら輸入でも、いいものだったらいい。（真美）

と、菜種学習から品質にこだわる子、そして、これも品質にこだわり、自然食品として商品化した「愛知食油」のようなやり方に生き残りの道を求めている子もいた。

地域の生活とつながっていた

国産菜種は外国産菜種に比べて値段が高い。もう作らなくなったということは分かってきたが、それでも菜種をもらえた理由にはならない。そこで、「地域の人は何のために菜種を作っているのか」と尋ねてみる。田谷さんの話の中にあった村の協同で作っているというところに着目させて考えてみる。そうすると、菜種より菜種殻、つまり、祭りの松明づくりのために毎年交代で畑を提供し、九月に種をまいて六月に刈り取る。その刈り取りも、組の割り当てが決まっていることも明らかになった。自分たちが菜種をもらえたということが地域とつながっていて、自分たちも参加する祭りを執り行うための重要な取り組みの一つになっていたことに、子どもたちはたいへん驚いていた。

ビオトープから始めた「人と環境」授業

〈二〇〇二年六年、理科実践を中心に〉

人と環境

六年の理科の学習を「人と環境」という大テーマを掲げたひと続きの学習にで

きないかと二〇〇〇年から実践を続けてきた。

それは、①ものの燃え方と空気②人や動物の体で二酸化炭素の排出を教え、このままで私たちは生きていけるのかという問いを引き出しつつ、植物を登場させる。光合成を教え、植物の大切さを教えたあと、学校の前でビオトープ活動に入る。環境を構成する四要素　土、太陽光、空気、そして水を押さえ、水さえ引いてやれば環境は整うということで、水路や池づくりからビオトープ活動は始まる。つまり、自分たちの環境破壊から始まって、そこに徐々に回復していく自然を観察していくことになる。③修学旅行で広島の牡蠣屋の植林活動に触れる授業を組み、食物連鎖を学び、④水溶液の性質で酸性雨、⑤大地のでき方で「地層と化石の学習」を組み、地球四六億年の歴史の中でどのようにしてこの地球環境ができてきたのかを学び、⑥最後に地域の環境問題を今まで学習してきたことをもとに考えるというプランだ。その実践の一コマを紹介する。

ビオトープで自然を満喫

ビオトープ活動を始めて二年目。六月、一・二時間目ビオトープ、三・四時間目水泳という日程を組み、存分にビオトープ活動を楽しんだ。スコップを持ち水路や池を掘った。水路が完成し自分たちの掘った思い思いの池に水が流れ込んでくると歓声が上がった。そのうちに水のかけ合い、泥のかけ合いが始まり、土で滑り台を作って、池に滑り降りる子どもたちも出現した。しまいには泥の池に温泉のようにつかる子や、田んぼの揚水をダアダアと出しながら、そこに寝そべる子が出てきた。

子どもたちの手作りの「クローバー池」はクローバーが青々と茂り、池にクローバー池と名付けした子どもたちの表情は豊かで楽しそうで、見ているこちらの方も幸せな気分になった。

二〇〇二年度は例年より早くビオトープ活動に入った。それは春の植物を調査し、中一がやったようにラミネートの植物カードを作ろうとした。しかし、子どもと協議する中で、どうしても活動に消極的な層が生まれてきた。それでも、さすがに自分の知らない植物を発見し、名前が分かると興味が出てきたし、自分たちのビオトープに夢をふくらませていた。

五月二日

テーマ：環境調査（植物）

気がついたこと

＊楽しかった。からすがいた。レモンハーブはいいにおいだった。草花がいっぱいいた。新しい穴をほりたいなーと思った。またやりたいなーっと思った。たのしかった。（千晶）

＊トノサマガエルがつかめてとてもたのしかった。トノサマガエルをかえしたら、ちょっとかなしいきもする。また一ぴきともだちができたかも。とにかくたのしかった。（覚）

＊ぱっとみたら、少ない種類しかわからんけど、かなりの種類がみつかった。ひとつの花でもびみょうに色がちがったりみわけるのが楽しかった。（まみ）

＊ビオトープには、いろんな草花、虫がいっぱいあった。またやりたい。私たちも、新しい穴をほって池みたいのを作りたい。楽しかった。（祥子）

＊たくさん動物も植物がなった。池の中にクローバーがあった。きれいにそだってた。おもしろかった。たのしかった。あしたもしたい!!うしろにせっ計図がある！（麻美）

大事件発生〜ビオトープが埋まる〜

ところが、突然の道路工事の開始で、今まで作ったビオトープが土に埋まってしまうという事態に陥った。ビオトープにいちばん関わってきた三年生は、杭が打たれ、テープが張られると「あの池にはおたまじゃくしがいるんやで、土で埋めたら自然破壊や」と顔を真っ赤にして訴えるのだ。池の中をのぞき込んでカエルの卵やヤゴを発見していた三年生の思いが、あのように現れたのだろう。そこで、今までの学習を中断して、六年生にもこの問題をぶつけて考えさせることにした。

①一生懸命にビオトープを作ってきた中一や中二の人たちにどのように知らせるか

②私たちがビオトープのためにできることは何かの二点で考えた。

①については、ほとんどの子どもたちが少しずつ方法は違うが「伝えること」で一致しているので、二〜三の例を挙げて後は省略する。

①中一・中二にしてあげられる事

＊手紙を一人ひとりに書く。

〈・理由を書く・これからの事もかく・意見も言ってもらう〉

＊ポスターや看板などを作って、いろんな所（町にポスター三枚、看板）にはる。（祥子）

＊手紙をおくる中身は—いま、ビオトープの所に道路をつくる計画をしてはります。でも、もうビオトープができなくなるし、そこにはキジがたまごをあたためています。なのでどうすればいいか、いっしょに考えてくれませんか？　島小六年生一同（祐香）

＊手紙で、れんらくする。

＊植物をおしばなにして、きねんにのこす。しゃしんもいっぱいとる。（実香）

②私たちがビオトープのためにできることは何か

＊もし、つぶれたら、ほかの場所につくって、べんきょうしたらいいと思う。

＊できないかもしれないけど、あまり、生き物をころしたくない。

＊むりかもしれないけど、少しつぶしても、また、はじめから、自然をつくってみたい。（常）

＊いまビオトープがあるところは、つぶれるから、つぶされないところに水の中の生物や植物をいどうさせる。もしそこが運動場になるときまったら生き物や植物をほんとうの自然の山や森にかえしたほうがいい。そしてまたビオトープができるところがあったら、そこをほったりしたりして、そこに自然をつくったりしたらいいと思う。（直道）

＊今、こうじをするんじゃなくて、冬の虫や魚が少ない時にこうじしてほしい。おたまじゃくしがカエルになるま

で（せめて）。
＊もう、道をつくるのをやめる……（無理……）。
＊道を四㍍くらいにしてもらえないか……？（無理っぽい）。
＊小学生最後のイベントと思って、一人一人、ドングリなど移動したり、そだてたりする。（果穂）
＊植物は移植し、生き物は観察をそのままにしておきたい！　たいへんかもしれないけど、みんなで、がんばりたい。でも、池がなくなるのは、ちょっとざんねんだ。水の事については、島の人、教育委員会、などいろんな人に相だんしてみるといいと思う。中一、中二の人たちに、もう前のビオトープが見られなくなるから、写真やビデオなどを送りたい。（祥子）
＊山をいどうしてもらうようにたのんで、早めにちがう池を作っといて環境をととのえといて、生きものを、うつせばいいと思う。道ができるのは六月やけど、それまでに、なんとか、のこる場所で新しいビオトープを作りたい。水も、島の人にたのみに行ったらいいと思う。しょく物も、うえかえたらいい。（しのぶ）
＊みんなで話し合う！（やれるところまで、がんばってみる！）教育委員会に文句を言いにいく！　ハードルをとびまくる！（笑）（奈津子）
＊おたまじゃくしやメダカは中庭の池でかったらいいと思うし、来年の六月できるとゆわはるけど、それはせき任をもてば自然が好きだったらできると思う。来年の六月でも……。（祐香）
＊もーあきらめよ！　どーせうちらは、はしとかも作れへんし、作ったとしても、どこにも作れへんと思う……。なんかオイラあきらめモードかも……。今思ってること。そこまでしんでもいいと思う。だって、虫やらの命がいっぱいなくなるやん。そんなんショベルカーでつぶして、うんどーじょー作って、ちょっと虫とかのこってて、マタ、しょべるカーで動かして死ぬかくりつあるやん。そんな二回も命うしなわして、人間の勝手すぎやと思う！　しかも、その山をつぶして、また二年後ぐらいに、つぶされたら、スゴイイヤやもん。命を大切にしなあかんって先生が言って、そんで、みんなそれまもってたやん！　ビオトープの中にあった草とか花とかとったら、先生おこったやん！　もー命大切にしよーや！　もうイヤあわぁ……。あーあきれた。（ひかる）
＊いどうすると生き物が死ぬんちゃう？（千晶）
＊どんぐりの木も、大きくそだつようにする。（実香）

これらの意見を集約し、
①中一、中二には事実を知らせ、ビオトープお別れ観察会を開く。
②まだ、工事にかからないところにビオトープを移転する。そして、植物や水生生物を移植・移住させる。
という結論になり、自前のビオトープを子どもたちの手で作ることになった。

危機意識が子どもたちのエネルギーを発揮させる
～自分たちのビオトープづくりの中での意識変革～

六月一四日（金）二回、ビオトープお別れ観察会を開いた。中学生や父母など五〇名あまりの参加になった。六年生も有志で残った。その後、水路建設を行い、その流域に思い思いにグループを作って池を掘った。水を流しては高さを測り、高いところをほり深めた。男子は水路堀に力を出し、女子はやや条件の悪いところに、草刈りから始めて池を掘った。そして、植物を移植し、水生生物を移住させた。最初、拒否していた子ども も意識を変えるようになってくる。次はビオトープで池を掘ったときの事後の感想だ。

六月七日　金曜日　天気　はれ

＊今日はビオトープをやりました。あんまりビオトープに興味はなかったけど、今日やってけっこうたのしくって いろいろやりました。初めは草をかって、そして階段もつくろうとゆうことになりました。じょうろに水をくむ作業も重たかったし、大変でした。水の道（水をつなぐ所）を半分男子に作ってもらい、半分女子がつくることになりました。穴もがんばって作ったけど、土が固くて大変でした。　（なつ子）

六月八日　土曜日　天気　はれ

＊今日、ビオトープをしました。いろいろ、もんだいがおこって、道をつくらはるから、話しあって、時間がかかったけど、たのしかった。でも、あつかった。私とひかで、木をあつめ。かいだんをつくることになりました。さいごに、先生がジュースをかってくれた。ありがとう。

またよろしく！　いろんな、大きい池ができるといいです。　（みか）

折目さんを招いての植物調査

ビオトープはもう秋を過ぎて、初冬を迎えていた。もう花もないし、ビオトープ活動をどのように進めていけばいいか困惑していた。そこで、この時期の植物観察についてどのように進めればいいか、専門家の折目さんにアドバイスしてもらうことにした。折目さんは、今の時期は植物と種を照合していくような活動だと成立するのでないかと、アドバイスしてくれた。折目さんにガイドをお願いして、植物観察がスタートした。子どもたちは植物を見つけて、折目さんに持っていく。そこで、植物の名前を聞いて、種と照合していった。そして植物図鑑に仕上げていった。

子どもたちと環境権

ビオトープ活動と環境権

このようにビオトープを核に、足もとから自然を考えていくと、子どもたちの自然環境への意識が見て取れる。それは前章でも見たように、ビオトープが埋め立てられるという危機の時に現れた。

これらの思いは、ビオトープに入って個別の生物をはじめとするさまざまな自

然を観察する中で命の存在に気づいているからこその思いだと思う。

自由遊びと環境権

島小学校には学校の前を川が流れている。その川は、やがてトンネルとなり、琵琶湖に通じる長命寺川へと流れていく。毎年、気温が上がってくると、休み時間の川遊びが始まる。靴を脱いでどんどん入って水生生物をつかまえる。そして、学級の水槽で飼う。子どもたちと自然の大きな接点になっている。学級には生き物係や飼育係が生まれる。この遊びは学校から帰ったあとも続く。異年齢の子どもたちが川で遊ぶ。そんな日が何日も続いたある日、三年生の一輝が、こっちへ来いと手招きする。行ってみると、口をとがらせて「先生！　白い水が流れてきて、魚が獲れへんようになった」と訴えるのだ。毎日川で遊んでいる一輝は、白い水が流れてきてからの変化を敏感に感じ取って訴えたのだ。彼らにとって川で遊んでいて魚がいなくなることは死活問題なのだ。この彼の姿は私に、これからのことを考えさせた。

島小子どもの権利憲章

島小には子どもの権利憲章がある。二〇〇五年の三月に卒業した子どもたちが、子どもの学校通信簿に書かれた自分たちへの批判を前に、このままでは卒業できないと思い残したものだ。それが今も先輩からの贈り物の一つとして、子どもたちの中に生きている。作った当時は八条からなるものだったが、二〇〇六年の六年生が島小の実際の生活にあわせて作り替えを行った。その中に第七条がある。第七条は子どもたちの環境権をうたったもので、島小は自然豊かなところにあるから条文に入れようということになった。その時、私は学校前の川での出来事を思い浮かべていた。子どもたちが素直な思いで作ったものだが、児童総会に提案してみると、五年生が「これは権利ではない、義務だ、マナーだ」と意見を出した。それに対して、六年は「義務でこんなこと出来るか。マナーっていうけど実際はやっていない。押しつけではだめ」などど意見を出した。この七条の議論は慎重にした方がいいと判断し、結論を多数決などで出さずに保留にして、五年生に託すことにした。託された五年生は六年生になってこの条文について研究し、「環境権」というものが実際にあることを学習して、改正第七条を作り上げた。このことが議論になったこと自体歓迎するべきことだと思うが、「権利と義務はセット」だとか「権利ばかり主張していると我が儘になる」とか言われていることの影響を受けていることも事実だ。生まれながらの子どもの権利として考えると、どのようなイメージが広がるのか。リオの地球環境サミットの一二歳の伝説のスピーチなどを、子どもたちと読みながら考えている。

植田一夫